

「東村山いきいきシニア」の現状と課題

—— 9年間の社会参加支援活動の意義 ——

日本社会事業大学

院前期 2004年卒 三輪 秀民

I はじめに

1 研究の視点

筆者は、9年前の2002年第41回研究大会で報告して以来、毎年、筆者が関わった地域福祉活動に関連するテーマで報告し、その報告内容をまとめる形で「社会事業研究」で発表してきた。

筆者は、前述の第41回大会で「男性中高年者ボランティアの生きがい支援と社会福祉協議会の役割—東村山市社会福祉協議会の地域福祉活動での出会いから—」のテーマで報告したが、その際、「東村山いきいきシニア」（以下「いきいきシニア」という）についても触れた。翌2003年の第42回研究大会で、「東村山市のいきいきシニアの活動と今後の課題—中高年者の生きがいと健康の支援を目指して—」のテーマで報告した。

筆者が2001年、日本社会事業学校（当時）の学生として、実習先としてお世話になった東村山市社会福祉協議会（以下「東村山市社協」という）での実習活動と東村山市社協の地域福祉活動計画からスタートした「いきいきシニア」への参加は、筆者にとっての「地域福祉」の原点である。そのときから、筆者は「いきいきシニア」とそれを支える東村山市社協のそれぞれの会員として、現在に至るまでそれぞれに関わりを続けている。

「中高年男性の生きがい支援」は、筆者の修士論文のテーマであり、「地域福祉活動の実践」とともに、筆者にとってライフワークと位置づけている。

その意味で、2002年6月29日の発足以来、「継続は力なり」を実践している「いきいきシニア」の9年間のシニアの社会参加支援活動の意義および今後の課題について考えてみる次第である。

2 研究の方法

東村山市社協および「いきいきシニア」関係者からのヒアリングおよび「いきいきシニア」の機関紙「あおぞら」、市報「ひがしむらやま」、東村山市社協「福祉だより」などの分析を行った。なお、「あおぞら」は、本年2月1日号で100号を迎えた。

II 研究結果の要旨

1 東村山市の概況

(1) 人口と世帯：（平成23年7月1日現在）

○人口： 153,558人

（男 75,817人 女 77,741人）

○世帯数： 69,546世帯

(2) 高齢化率： 21.9%（65歳以上人口33,637人）

(3) 町の数： 青葉町・秋津町・恩多町・久米川町・栄町・諏訪町など13町

(4) 地勢： 東京都の中北部・武蔵野台地に位置、面積は約17平方km

2 「いきいきシニア」の概要

(1) 誕生の経緯

東村山市社協が策定した地域福祉活動計画（第2次）の重点項目である「シニアアクティブ研究会」を改め、2002（平成14）年6月29日（土）に誕生した。

(2) 目的

高齢者が元気いっぱい自らの生を全うできるよう「生きがいづくり」および「健康づくり」を進め、地域社会への参加を促進させ、高齢者が相互に支えあって暮らせる環境を整備することを目的としている。

(3) 会員の状況

会員数 508名 + 2団体（平成23年4月26日現在）

参考： 発足時、約100名（平成14年6月29日現在）

(4) 会費・参加費について

会員の年会費は、1,000円である。参加費として、行事への参加の都度、参加者から100円を徴収し

表1 組織（発足時との対比）

平成23年4月現在	発足時（平成14年6月29日）
代表 : 下地 恵得・代表	代表 : 下地 恵得・代表
事務局 : 浅沼 節子・局長	事務局 : 下地 恵得・局長
健康長寿発進部 : 本戸すみ子・部長	健康長寿発進部 : 本戸すみ子・部長
高齢者支援部 : 菊川 操子・部長	高齢者支援部 : 菊川 操子・部長
情報部 : 竜野 力也・部長	情報渉外部 : 沢崎 一郎・部長
渉外部 : 中西 真海・部長	
生活文化部 : 下地 恵得・部長	

ている。これら年会費と運営費が「いきいきシニア」の運営費となっている。このほかに、いきいき元気塾が、東村山市社協の「ふれあいいきいきサロン助成金」を受けて運営されている

(5) 総会・組織について

○定期総会 : 毎年5月（年度終了後2ヶ月以内）に開催される。その際、有識者の特別講演がある。平成23年は東京都健康長寿医療センター（旧名称：東京都老人総合研究所）の大淵修一氏（いきいきシニア顧問）が「いきいきシニアのこれから」のテーマで講演した。

3 「いきいきシニア」の活動状況

(1) 元気塾

東村山市の地域ごとに設定されている15の元気塾が基本的な活動の単位になっており、月1回開催されている。例えば、久米川町で活動している「久米川塾」では、4月1日（金）10:00～12:00、久米川ふれあいセンターで、体操・筋トレ・合唱などが行われた。

(2) 各部ごとの事業

○健康長寿発進部 : 「悠友くらぶ萩山」・パス研修などの企画・運営を行っている。
○高齢者支援部 : 「ねこの手（介護保険サービスなどの公的サービスでカバーされない

サービスの提供)」・「料理交流会（毎月1回東村山市公民館調理室で開催、食事会を兼っており、スペースの関係から75歳以上の会員を優先）」・「おしゃべりサロン（月3回程度開催）」などの企画・運営を行っている。

○情報部 : 機関誌の編集会議・印刷・仕分け作業などを行っている。

○渉外部 : 東村山市や他市の団体の交流などの企画・運営を行っている。

○生活文化部 : 「筋力補強塾（中央・南部・東部の3箇所で開催）が指導し抗重力筋を中心に鍛える）」・「ひばりの集い（一人暮らし高齢者を対象）」・「いきいきみんなのうたごえ（平成23年3月にスタート、毎月開催）」・「一泊研修旅行」・「読書会」・「新入会員歓迎茶話会」、などの企画・運営を行っている。

○事務局 : 会計事務・予算決算事務・各種会議の開催などを行っている。

Ⅲ 考察

1 「継続は力なり」の実践

ほぼ10年間にわたって、任意団体として活動を続けていること自体が賞賛に値すると考える。いきいき元気塾が、東村山市社協から、「ふれあいいきいきサロン助成金」を受けて実施しているとはいえ、比較的小額な年会費・参加費と関係者の

ボランティアで運営していることの意義が大きい。

運営に関しては、種々の「仕掛け」が工夫されている。第1に、プログラムが非常に多いことがあげられる。前述の通り、地域ブロックごとの「いきいき元気塾」をベースとした個別プログラムに加え、全体プログラムも用意されている。第2に、参加費として、行事ごとに100円を徴収していることがあげられる。参加者にとっては参加意識が高まり、企画者にとっては緊張感をもって企画しなければならないからである。下地代表によれば、「100円の参加費は、茶菓子代ではなく、健康への感謝代である」とのことである。第3に、機関誌「あおぞら」を原則として責任者が手渡しで会員に届けていることがあげられる。これは郵送費の節約だけではなく、見守りと声かけを通じて安否確認とともに会員の維持に貢献していると考ええる。

2 下地代表のリーダーシップとユニークな発想
機関誌「あおぞら」の冒頭に、下地代表が毎回寄稿している。筆者はそれを見るのが楽しみである。会員にも同様な意見がある。

第58号では、「Successful Aging」(J.W.Rowe & R.L.Kahn著)の読書感想を書かれていた。「サクセスフル・エイジング(筆者注:適切な訳がみつからないのでこのままで表示する)」とは、①病気を防ぐ②心身の機能を高くする③積極的に社会にかかわる、という3つの要素を満たした元気な老い方を指すというものである。同著に関しては、筆者は修士論文にも引用文献としたこともあったので、なつかしくもあり、大変感銘したものである。

いずれにせよ、いくつになられても勉強され、時代の先を見据えた問題提起をされている。

3 社会参加支援活動の意義

高齢者がいきいきと暮らしていくには、「生きがいづくり」と「健康づくり」が欠かせない。そのためには、社会参加が必要になる。家に閉じこもりがちな高齢者(特に男性)に社会参加を呼び

かける「いきいきシニア」の活動は、社会福祉関連機関・施設、専門職・ボランティア、制度・サービスと並んで、地域の社会資源(地域資源)の一つと位置づけることができよう。

4 この10年間の成果と次の10年に向けての活動の構想

発足した2002(平成14)年6月当時は会員100名程度であったが、現在、約5倍の500名になっている。今後さらに増加することを期待したい。次の10年に向けての活動については、「地域予防リーダー養成講座」(いきいきシニアの次のリーダー育成)や「10周年記念誌」発刊を企画している。

IV 今後の課題

1 会員増強について

9年前の発表で、筆者は会員1000人達成の目標を提案した。このときの東村山市の高齢者の4%に相当する数字である。現在の会員は、約500名なので、あと10年かけて1000名を目標とすることを改めて提案したい。

この目標を達成するにはかなりの努力が必要となろう。第一に、会員の健康の維持増進と会員への声かけが会員維持・増強の大きな要素である。というのは、高齢者の会員が多いことから、入会者は毎年一定数あるものの、亡くなられる方がいたり、身体的な理由などから外出が困難になり、そのまま退会につながっていると見られる会員もいるからである。第二に、「団塊の世代」の取り込みが鍵になるのではないかと考える。ただし、「団塊の世代」は、価値観が多様であり、自己主張も強いとされており、すんなり「福祉の世界」へと転身してはいない。したがって、「団塊の世代」全員が高齢者となる2025年を目処に何らかの仕掛けをして行くことが求められる。

2 行政とのかかわり

行政とのかかわりは非常に微妙ものがある。任意団体に対する財政的な援助は期待できないし、また、そうすべきでもないと考ええる。しかし、行

事を開催するには会場が絶対条件でもあるので、環境整備を通じて援助していただくとよいのではないかと考える。

また、Ⅲ－3項で指摘したように、「いきいきシニア」が社会資源の一つになっており、介護保険制度における「介護予防プログラム」が必ずしもうまく機能していないということを考えると、シニア層がこの種の活動に参加することが介護予防につながると考えられる。このようなことから、例えば、地域福祉計画に位置づけるなど、バックアップするように行政に働きかけることも一案ではないかと考える。

3 「ねこの手」のあり方

9年前にも課題として指摘した「ねこの手」は、介護保険サービスなどの公的サービス以外のサービス提供を目的として、着実に進展してきた。2010（平成22）年までに菟山町など9つの町の利用者の依頼経路をみると、多い順に、地域包括支援センター18件、利用者本人10件、民生委員7件、ケアマネジャー5件、社会福祉協議会4件、在宅介護支援事業所4件、その他3件、計51件となっている。一人暮らし高齢者や認知症高齢者が増えるなか、介護保険制度のサービスでは対象になっていないサービス（例えば、足が不自由でゴミ出しができない）への対応は地域の課題となっている。行政もこれらの問題に目を向けるように働きかけることが必要であると考えられる。

4 他団体との交流の促進

筆者は、9年前に「いきいきシニア地域福祉学会」を提案した。これは地域住民と教育機関（大学や高校など）との交流を意図したものであった。

2007年、当時の「東京都老人総合研究所（介護予防緊急対策室）」（現在は「東京都健康長寿医療センター（介護予防緊急対策室）」）主催で始まった「介護予防リーダー養成講座」は、現在も続いているが、この講座を通じて、いきいきシニアは他団体との交流も企画されている。

「いきいきシニア」は、いわゆるシニアを対象

としているが、世代を超えた若年層との交流を検討することを提案したい。もちろんベースはシニア同士の交流ではあるが、プログラムのなかに、幼稚園・保育園・小学校・中学校などとの交流を加えるのである。これが実現すれば、「老若男女共同参画社会」のミニ版が実現することになるだろう。

「いきいきシニア」は、多数の実習生を受け入れているが、筆者による第50回大会での発表を通じて、参加者が関心をもち、「いきいきシニア」との交流へと発展していくように期待したい。

V 社会福祉研究大会「高齢者への支援」分科会でのコメント・質疑について

1 村川浩一先生（助言者）のコメント

(1) 会員増強の一環として、「いきいきシニア」におけるシニアとは中高年を意味しており、50歳台のシニアの取り込みも一案ではないか。ただし、現役世代であるから、彼らのニーズに応えるようなプログラムも必要になるだろう。

(2) 「ねこの手」活動に関しては、社会貢献活動にもつながっており、関係者の自主性・自発性が期待されている。運営面で苦勞されているようであるが、「地域包括支援センター」との連携を検討してはどうか。

(3) 「団塊の世代」の取り込みについては、他の市町村でも研修プログラム・講座などが開催されているが、その後の活動には濃淡がみられる。いきいきシニアは、「老人クラブ」との違いを鮮明にすることも一案であろう。「2015年問題」に関連し、「団塊の世代」の全員が高齢者となる2015年を目処にいかにか彼らを取り込めるか、数年後に改めて本学会で発表することを期待したい。

2 フロアからの質問と回答

(1) 質問：恩多町の民生委員をしており、ある住民のニーズを「ねこの手」のサービスにつなげたが、サービス提供者（サポーター）が少ない（しかも80

歳台?)ように思われる。恩多町には何人いるのか?他の町の状況はどうか?

回答: 恩多町のサポーターは1人、多い町としては、萩山町10人、富士見町7人、美住町7人、栄町5人などとなっている。サポーターの数を増やさないと、ニーズに応えられない面がある。本件は持ち帰って、いきいきシニアに話をつなげたい。

(2) 質問: 「いきいきシニア」のような活動は他の市町村でもあるのか。

回答: 市町村ごとにそれぞれの地域特性を生かした活動を行なっている。例えば、西東京市では、西東京市社協ベースの住民懇談会(小学校区単位)があり、千葉県の柏市では市民保健センターベースの「おせっ会活動」(町単位)などがある。

VI おわりに

助言者およびフロアから言及のあった「ねこの手」活動に関し、2点述べる。

第1点は、虚弱高齢者へのゴミ出し支援に関し、他市の事例を紹介したい。筆者が住んでいる西東京市のゴミ回収の方法は個別回収である。また、神奈川県鎌倉市では、原則として約10戸単位ごとのグループ回収であるが、ゴミ出しが困難な虚弱高齢者については、自宅前に出しておけば個別回収を行っている。東村山市のゴミ回収方法は個別回収であるが、市と委託業者の契約では、集合住宅については、集積場に出さなければならない。虚弱高齢者にとっては、これがきついのことである。ゴミ出しが困難な虚弱高齢者を対象に、個別回収を行政に働きかけることも一案ではないかと考える。

第2点は、助言者からコメントいただいた「地域包括支援センター」(以下「支援センター」という)との連携に関してであるが、実は既に行っており、昨年度の実績では年間18件(合計51件中最大)が支援センターから「ねこの手」への依頼であった。ただし、逆に、「ねこの手」から支援センターに情報を提供する場面もあると思われるので、情報交換を含め両者の関係強化を図ることが大切であると考えます。